

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成24年10月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 京都大学総合博物館

職 名 館 長

氏 名 大 野 照 文

助成の種類	平成24年度・国際交流助成		
事業名	環太平洋地域における大学博物館の学術標本ネットワークの構築		
実施期間	平成24年 9月11日 ～ 平成24年 9月14日		
実施場所	京都大学 時計台記念館、総合博物館		
参加者	総数 100名	内訳 海外 33名 国内 67名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(写真集 プロシディング)		
会計報告	事業に要した経費総額	5,083,898円	
	うち当財団からの助成額	3,000,000円	
	その他の資金の出所	基盤強化経費、総合博物館運営交付金他	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額(円)	財団助成充当額(円)
	会場借料	129,150	0
	印刷費	393,750	0
	当日要員関係費	352,625	352,625
	会場レイアウト費	118,125	0
	招へい旅費(国外)	2,647,375	2,647,375
	招へい旅費(国内)	194,480	0
	学内者旅費(犬山地区)	88,820	0
ブレ・パーティ	99,263	0	
コーヒープレーク	40,430	0	
Buffet Party(会費徴収)	238,440	0	
人件費	781,440	0	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

環太平洋地域における大学博物館の学術標本ネットワークの構築

総合博物館では、かねてからJSPSアジア・アフリカ学術基盤形成事業(2011-2013)に採択された「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」事業等で、標本コレクションを基盤とする国際的研究・教育ネットワーク構築を先導して進めてきた。この流れをさらに発展させるため、今年度はさまざまな活動を行ってきた。4月には山東大学威海分校との学術交流協定締結とゼミナールの開催、5月にはベトナムより若手研究者の来日、6月には四川省にてセミナーを開催、さらに7月には、東アジアの脊椎動物種多様性に関する第二回国際シンポジウムを京都大学で開催した。

これらの準備をもとに、平成24年9月12日～14日まで、京都大学および京都大学総合博物館はAPRU（Association of Pacific Rim Universities：環太平洋大学協会）と共催で、「大学博物館研究シンポジウム－先端研究の中核としての大学博物館コレクションネットワークの構築－」を開催した。本シンポジウムは上述の京都大学の学術標本を中心としたアジア地域での研究・教育のネットワークづくりの実績の上に開催したもので、国際交流推進機構長森純一副理事を組織委員長とし、京都大学教育研究振興財団からの助成を受け、総合博物館が主担した。

シンポジウムには、APRU加盟大学を中心に13カ国より100名が参加、口頭発表、ポスターセッション、ワークショップが3日に渡って行われ、タイトなスケジュールにもかかわらず緊張感が途切れることなく、活発な経験・意見交流が行われた。また、総合博物館の常設展・開催中の企画展「陸上脊椎動物の多様性と進化－京都大学の挑戦」および文系・理系の収蔵庫の見学ツアーも行われた。質・量的に優れた標本類が温度や湿度が管理された収蔵庫に整然と収められているのをお見せすることができたのは、京都大学の一員として誇らしい出来事であった。

本シンポジウムでは、大学博物館の標本は急速に研究・教育への利活用頻度が高まりつつあり、活用分野も従来の博物科学の分野はもちろん、バイオテクノロジー、地球環境の復元・予測、維持可能な天然資源利用など工学から社会科学まで広い最先端研究分野に拡がりつつあることが報告された。シンガポール大学では、分子生物学の研究素材としての生物組織標本の冷凍保存を重視した標本収集がなされていることが報告された。東北大学からは、微小化石の非破壊3次元画像取得技術とその古気候復元への応用の可能性について報告があった。収蔵については、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学が、標本を収蔵庫と展示場を兼ね合わせた場で展示するという大胆な試みを行い好評であることが報告され注目された。

また、これらの標本の利活用を円滑にするためのデータベース化についてもいくつかの事例が報告され、とりわけ、貴重な学術標本資料のデータベース化が国際協力によって行われてい

る事例も紹介された。植民地時代に京都大学が収集した植物の押し葉標本を、国立台湾大学と京都大学が協力して、現在デジタルデータベース化を進めているのがその好例である。

さらには標本を基に行われた研究の背景を記した著名研究者のフィールドノートなどを広くアーカイブ化することの重要性が認識されつつあり、カリフォルニア大学の事例の他、とりわけ京都大学の研究資源アーカイブは、映像ステーション見学を含めた紹介によって参加者の注目を集めた。さらに、展示を博物館から市中に持ち出す大胆な試みについても報告された。これは、東京大学からの報告であり、美学的に選び抜かれた学術標本が世界中の都市で展示され好評を得ている。また、ワシントン州立大学からは、少数民族の遺跡の考古学発掘調査において当事者と協働することにより、多様な民族・文化の相互理解の橋渡し役を果たすなど、従来の「アウトリーチ」の枠を超えた大学博物館ならでの地域・国際社会への貢献の事例も報告された。博物館の運営についても、日本の主要大学のように、総合博物館化したものや、あるいは各学部等に分散したものをネットワーク化して運営する例など様々あることが紹介された。

以上のことから本シンポジウムでは、大学の研究・教育・社会貢献において標本はますます重要な役割を果たすことが多くの大学に認識され始めていることが明らかとなった。このことは、既に膨大な標本を擁する大学博物館だけでなく、これから標本を収集・整備しようと意気込んでいる大学からも本シンポジウムに多くの参加者のあった事実が裏付けている。

本シンポジウムの最大の成果は、今後益々利用価値が高まってゆく標本について、個別の大学間での競争ではなく、国際ネットワーク化を図り大学や大学博物館が密接に協力することでこれら標本コレクション群を大学での研究・教育はもちろん、大学の国際社会への貢献の推進に役立てるべきであるとの合意を得られたことである。また、このネットワークを実現するためにシンポジウムを定期的で開催して課題の検討を行う必要があることが決議され、APRU本部への働きかけを行うことも決められた。また、APRUの事務総長Tremewan氏も全面的協力を約束され、すでに10月6日、京都において京都大学総合博物館長大野照文と非公式な会合を持ってくださっている。さらに2年後の開催を目指して、複数のAPRU加盟大学博物館が開催候補地としての検討に入っている。

今回のAPRU大学博物館研究シンポジウムは、このように大学や大学博物館の未来に指針を与える具体的提言やアクションを生み出した有意義なものとなった。貴財団のご支援に感謝するとともに、今後の国際的博物館ネットワーク作りにおいて、提唱者である京都大学総合博物館が指導的役割を担い続けることができるよう引き続きご支援いただきたい。